
微瞑むように 【番外編 影よ、金色の晚霞に瞑りを】

ブシィ=ナスカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微瞑むように 【番外編 影よ、金色の晚霞に瞑りを】

【Nコード】

N1832B

【作者名】

ブシィⅡナスカ

【あらすじ】

「この世界の裏側には、冥界があるんだよ。不思議な力を持った冥人達の幽玄の世界さ」ボケたばあちゃんの世迷い言だとばかり思ってたけど、なんか本当らしい。ついでに、決して交わる事の無い二つの世界の番人らしい。……村一番の、あの馬鹿が。一話完結型ライトファンタジー、番外編。

前編（前書き）

この作品は番外編です。

独立した作品として読めますが、先に本編である『微瞑むように
第1話』『微瞑むように 第2話』を読了される事をお勧めします。

前編

「俺のあいつはもう居ないけど、お前はどうかこの長い道を歩んでくれ。そして必ず——」

番外編 影よ、金色の晚霞に瞑りを

村の聖女ガリーナが泉に向かったのは、朝も早い頃だった。

小鳥の声麗しく、樹木の遮る緑の射光を斜めに浴びながら歩く森は早朝特有の清浄な空気を孕んでいる。夜半に振った雨もとうに上がり、湿った草が秋の風にかじかむ様に時折揺れた。

ガリーナは吹けない口笛を吹こうと唇をすぼめながら、水桶片手に振り回しつつ小道を往く。

村の大人達は農作業や放牧の最中に、軽やかな口笛で楽しそうな音楽を奏でる。しかし若い女が、まして聖女が吹くものではない、とおじいちゃんに怒られた事がある所為ではないだろうが、ガリーナは口笛が苦手だった。吹こうとすればするほどひゅうひゅうと口からただの隙間風が通り過ぎる。

満足するまで努力を続けた後、聖女はようやく泉に辿り着いた。

途中で花の咲き乱れている陽だまりにしゃがみこんだりや巨木の洞を覗いたり、の寄り道を繰り返したので、目的地に到着する頃には太陽は昨日以来の輝きを完全に取り戻していた。

「うーん、気持ちの良い朝です。背がによきによき伸びる気がします」

鏡のような泉の水面を眺めながら、ガリーナは嬉しそうに笑う。

別にとくべつ背が低い訳でも成長期である訳でもない。彼女は時折、何も考えずにものを言う。その癖が彼女が村一番の馬鹿と呼ばれる所以の一つであるが、彼女自身は特に気にしていなかった。

泉のふちにしゃがみ込み、水桶にいっぱい澄んだ水を汲む。人差し指を差し入れてその冷たさを確認すると、ガリーナは立ち上がって元来た道を帰ろうとした。

その時、この場に自分以外の誰かがいる事に初めて気が付いた。対岸に巨木の切り株がある。その上に、青年が座ってじっとガリーナを見つめていた。

ガリーナは思わずまじまじと相手の顔を眺めた。しかし、その相貌が脳裏に浮かぶ村の誰とも一致しないことに首を傾げると、改めて青年を見つめ直す。

（外から来た人……でしょうか。こんな田舎に何しに来たんでしょう）

自慢ではないが、村には何一つ見所が無い。あるとすれば聖女自身だろうが、わざわざ彼女を訪れに来る物好きなど殆ど無いに等しい。

青年は、どこか険のある目つきでガリーナの視線を受けていた。

精悍な作りの仏頂面に眉間の皺、どう見ても何か良からぬ事を企んでいるような相貌の怪しい人物である。しかしガリーナは、他人を疑うのは良くない事である、という子供ですら喝破出来るような主義の持ち主だったので、にやかな笑顔と共に会釈をした。

すると相手は驚いたように目を見開き、顔を背けて周章したように金色の髪を撫で付けた。

（照れ屋さんでしょうか。じゃあ、あんまり見つめたら悪いですね）
そう考え、踵を返して泉から離れた。

青年が再び自分の後姿を凝視し始めた事にも、全く気付く事無く。

雨上がりの地面には湖のような水溜りがそこかしこに出来る。それは小さな池だったり、大海だったり、様々に姿を変えて青空を映

し出した。

大地にしゃがみ込んでその地図を好き勝手に創造している少年は、後ろに人が立った事にも気付かなかった。西側の堤防を作るのがなかなか難しく、下手をすれば南側に水が一気に流れ込みそうになるので、自分らしくもなくその調整に没頭していたからだ。

「おー、長い川ですねえ。すごいすごい」

「うっわ！」

唐突に真上から降ってきた声に、少年は飛び上がって後退りした。折角作った地図が壊れて南側が水没したが、そんな事すら歯牙にもかけぬ調子で心臓が高鳴る。赤面してゆくのが自分でも解った。

「勿体無い、いい堤防だったのに。……でも土遊びだなんて、まだまだ可愛いですね。キリアは」

そう言うときガリーナは水桶片手にににこと——本人はにやにやのつもりかもしれないが——笑いながら少年を見下ろした。

キリアは見られたくなかった場面を一番見られたくない人間に目撃されたことに口を尖らせ、怒ったように上擦った声を出す。

「う、うるせえな。金属性の冥魔術遣いは、土と親しむと強くなれるんだよ。遊びじゃなくて鍛錬だよ、鍛錬」

「冥魔術ですか。使っちゃ駄目だって言ってるのに」

いくら不平を言っても友人であるこの小さな魔術遣いを止める事は出来ないと知っているのだろう、ガリーナは頬を膨らませてキリアを見つめるに留めた。

ガリーナは、千年ほど前から人界と冥界の境界を守っていると言われていたり言われていなかったりする伝説の聖女の後継者である。だから、境界を超えて冥界の力を拝借するという冥魔術は、聖女にとっては忌むべきものののだ。

とはいえ、聖女自身が眉唾ものの存在であるため、強く禁止を提唱することも出来ない。

精々小言程度に叱るのが常だった。

「ところで、冥魔術って何の為にあるんですか？ 何に使われるん

ですか？」

すると、キリアは俄然嬉しそうに目を輝かせて胸を張った。

「戦争じゃねえの、主に」

「わーもつと嫌いになりました」

「馬鹿、違つよ。昔は戦争に使う為に技術を磨いて今現在まで発展したんだ。おれだって戦争なんて嫌いだけど、冥魔術は好きだ。高度な遣い手になると、怪我をあっという間に治したり火事を消したり風車を回したり、生活に密着したお役立ちスタイルを確立できるんだぜ。超かつこいいじゃんか。おれはまだ石飛礫を頭に落としてたんこぶ作らせるだけだから、さしずめガキ大将レベルだな」

ガリーナは小さく呻いただけだった。

嬉々として格好良さとは何かを語るキリアに、理解出来ないような視線を送った。

それにな、と少年はトーンを落として続ける。再びしゃがみ込んで、土の上に線を引いて雨水を誘導した。

「知られている限りで最上級の、因果律つてのを曲げる術もあるって聞く。例えばだ、大きな川を、こうやって無理やりもう一本に枝分かれさせる。そうすると川は二股になって、元は同じはずなのに末端は全く別のものになるだろ。これが世の理を操作する、存在自体が禁じられた冥魔術」

「ぐー」

「早いなオイ！」

ガリーナの鼻ちようちんを指先で弾き消しつつ、大地に描かれた川も踏みしだく。

「だって興味無いんですもん。取り敢えず、やるなら漬物石レベルくらいにはなってくれないと無駄で無駄でしょうがありません」

不貞腐れたように目を擦るガリーナに、キリアは溜息で返した。水と土が交じり合った足の下で、ぐじゅぐじゅと気持ちの良くない感触がする。

「ま、伝説だからな。使える奴なんていないだろ。いたとしても世

の理を操作したいと思うなんてよっぽどだぜ、諦観と共に迎合して社会の歯車になる事を拒むんだからな」

歯車大事だぞ子供じゃあるまいし、とぶつぶつ言いながらキリアはぬかるんだ大地に指を突っ込んだ。

すると、それまで眠そうな顔をしていたガリーナが、水桶を隣に置き直して口火を切った。

「そんな事より、今日が何の日か知ってますか？」

俄然目を輝かせ、身を乗り出して来る。

「さあ。建村記念日？ アンクルトーマス記念日？ それともアレか、羊小屋の暴動悪夢の敗戦日？ 月は見ていた？」

ちっがいます、とガリーナは頬を膨らませてキリアの刈り取られた稲穂のような髪をわしゃわしゃと掻き回す。

「私の誕生日です、花も恥らう麗しの十七歳になるんです！」

鼻も提灯を作る恥ずかしい十七歳ではなかるうか、と頭を乱されながらもキリアは思ったが口にはしない。それが男の嗜みだと考えるからだ。

半眼で少女を斜めに見、あっそ、とつれなく返して立ち上がる。

あっちこっちに跳ねた髪を手櫛で直していると、しゃがみ込んだままの彼女が「なんかください」と上目遣いに見つめてきた。

翠色の大きな瞳に自分が映っている。

キリアは、時々ふと彼女が村で一番の美女と名高い靴屋の娘よりもずっと美しいのではと思う時がある。何時も色を変える派手な色彩の服も、彼女に大人しく従いそして華やかに映えている。しかし、聖女は生涯一人身でなくてはならないのに加え、頭の中は紛れも無く村で一番の馬鹿であるから、それが上手い具合に相殺しているのだろう。だから大人達は彼女に関して何ら容姿の評価を与えないのだ。

与えてはならないのだ。

聖女は村人であっても、人間ではないのだから。

「普通、五つも年下の子供にねだるかよ」

「今日からは六つです」

むつつりと返すガリーナに手を振って、キリアはその場を後にした。

偶に彼女の事をよく考えると、何故か悲しくなる——気がする。人並の人生すら送る事が出来ないと、予め宣言されているのだからけれど彼女はいつも平気な顔でへらへら笑っている。

「ああ、そうだ、」とキリアは足を止めて振り返った。ガリーナはまだ頬を膨らませたまましゃがみこんで少年を見つめている。

「最近こつち方面に王都からの死刑囚が逃げたって領主が警告してきた。変な奴見たら絶対に近づくなよ。すぐに青年団に通報しろよ。いいな、ガリ」

ガリーナは目を丸くして、そして大きく頷いた。
「分かりました。気を付けます」

それから数刻、太陽が高くなってから、自宅の古い寺院で編み物をしていたガリーナは漸く気付いた。

「ああ！ あの人、怪しいです！」

驚いて椅子から飛び上がり、弾みで落とした編み物を慌てて拾って立ち竦む。

道理でキリアの言葉を聞いてから何か引つかかると思った。朝に泉で会った見知らぬ青年こそ、彼の言う変な奴そのものではないか。自分の頭の回転速度の遅さに愕然としつつ、部屋をうろつくと歩き回る。

彼はまだ泉にいるだろうか。

少なくとも、村の近辺にいることは確実だ。

「死刑囚さん……でも、話せば何とか戻ってくれるんじゃない、いえ、でも」

脱走は重罪である。青年団に通報するのが一番良い方法だとは解っているが、血の気の多い若者達が異端者であり犯罪者である人間に手荒な事をしないとは言えない。それに死刑囚ということは、少

なくとも誰かを手にかけた事があるというのは確かなのだから。

ガリーナは延々何十周も部屋を歩き続け、やがて目の回った覚束ない足取りで外に出る事にした。

一番親しい友人であるキリアに相談するのが一番だと思った。彼はまだ少年で自分よりも幼いけれど、利発な子供だ。きっと一も二も無く通報しろと断言するだろうが、それでもそうやって背を押して貰いたかった。自分自身の通報によって彼を死刑台に上げることになるのだという事実は、彼女には重過ぎる。

肩を落しながら玄関の扉を開け、そして少女はそのまま動きを止めた。

暫く凍ったまま前を見据えていたが、やがて静かに再び扉を閉める。

「……………」

鍵を下ろしてノブを見つめる。

今日にした光景が何だったか、脳内で処理するのに大分時間がかかった。

扉を開けると、普段は緑の木々と青空が見える。この寺院は村から少し離れた場所にあるので、森を縫うような小道を真っ直ぐ進む必要がある、その道も扉の正面に見える。

しかし、今見たのは、青い空でも美しい秋の森でも水に濡れた道でもなく、扉の前で佇む金色の髪の青年だった。

ガリーナはヴェールを直すと、もう一度困惑したように扉を眺めた。

「ええと……………。ど、どうしましょう？」

その問いに答えてくれるものは誰もいない。その時、ドアが敲かれた。

うひゃ、と悲鳴を上げて飛び上がると、聖女はテーブルの下に隠れた。足に捕まって扉を凝視するが、相手は規則正しくノックを繰り返すだけで、強く叩いたり蹴り破ろうとしたりなどする気配はない。

「開けてくれないか。水が欲しい」

微かに扉から漏れた声に、雨水を飲んでください、と返す訳にもいかず、ガリーナは掠れ声で訊いた。

「殺しませんか？」

すると相手はノックを止めた。大いに逡巡する気配が伝わり、その間隙に何とか混乱を収めた聖女は机から這い出して扉の前に立つ。

「なんで？」

心底困惑している声音だった。

「いえ。あの――貴方は死刑囚さんですか？」

「違う、そいつを追ってる冥魔術遣いだ」

「ほんとですか？」

「信じない？」

いえ、と呟いてガリーナはそろそろと鍵を下ろして扉を開けた。頭一つ分は上にある青年の顔は、現れた聖女に微かに笑ったようだった。

「ありがとう、お前なら開けてくれると思った。水、貰えるか？」

青年は椅子に座り、ガリーナの汲んできた飲み水を美味しそうに飲み干す。その様子をじっと見詰めていた聖女の心中は複雑だった。彼が死刑囚であるか、ないかがまだ判断がつかない上に、聖女として異性と二人きりでいるという事が喜ばしいことでは無い。男性に十秒以上触れられると聖女失格である、と子供の頃に散々読まされた「よいこの聖女のためのびき」に嫌と言うほど強調されていたから、最早彼女のこの状況への畏怖は条件反射に近い。

「人を疑うのは良くないって無理矢理自分に言い聞かせてる顔だな。そりゃ駄目だ、人を見たら泥棒と思え。ついでに男を見たら痴漢と思えってな」

コップを机に置くと、青年はガリーナの仔細顔に口の端を上げて揶揄した。

驚いたガリーナは、「痴漢さんなんですか？」と顎を引いて青年

を凝視する。普通ならば馬鹿か、そんな訳無いだろう、と呆れたように返されるのだが、彼は小さく慈しむように笑っただけだった。「痴漢じゃなくてシイナ、この辺りに逃げてきた死刑囚を捕まえに来た。安心しろよ、俺に限っては泥棒でも死刑囚本人でもない。脱走犯がこんな健康的な顔で立派な服を着てる訳ないだろ？」

目つきの鋭い男性だと思ったが、笑うと随分人懐っこい顔になる。自分より三つ四つ上だろうか。

「分かりました、信じます。冥魔術遣いだっていうのも信じます」

「本当は見せてやりたいんだけどな。人前で気楽にやるもんじゃないし、第一家を壊されても困るだろ」

「……すごく」

神妙な顔で頷くガリーナを一瞥し、コップの淵を撫でながらシイナは続けた。

「一つ、頼みがある。この村の連中は猜疑心が強くてな、この状況下だと外部の人間なら誰でもとっ捕まえて縛り上げようとしかねない。そうなると困るんだ、あいつを捕まえられなくなる。だから黙っててくれないか」

俺のこと、と付け足してガリーナの様子を上目遣いに伺う。

ガリーナはまた困惑した。あらゆる事象が不自然にも思えるこの状態だが、要は彼を信じるか信じないかの問題だ。そして彼女にはシイナが嘘を吐いているとはどうしても思えなかった。

死刑囚の事を口にする度、僅かに彼の目に憎しみにも似た暗い光が宿る。それはとても哀しい光芒だったけれど、信じざるを得ない色をしている。

「言いません、黙ってます。誰にも言いません、貴方が死刑囚さんを捕まえるまでは」

するとシイナはもう一度笑った。歳相応の、幼い笑みで。

「そう言ってくれると思った。お人よしの裁縫好きの聖女の噂は本当だと信じてたよ」

聖女という言葉が初対面の人間から出てきた事に驚愕したが、す

ぐに納得する。彼女の青い花模様の服は明らかに聖職者のそれに近く、ヴェールも被っているから誰だっで一目見てガリーナがこの村の聖女だと言う事は認識できるだろう。

「何ですかそれ。もうちょつとかっこいい噂が良いです、それじゃなんだかもつさりしてます……」

「じゃ何が良い？ お人よしの絶世の美女か、お人よしのお色気聖女か？」

「それじゃ単に嘘大袈裟紛らわしいです……」

シイナが可笑しそうに笑い声を上げると、ガリーナも初めて笑みを漏らした。シイナと同じテーブルにつくと、外の人間に対する好奇心が頭を擡げてくる。

気が付くと、不快感は完全に姿を消し、シイナの語る話に夢中になっていた。彼は生まれ育った農村を出て高名な冥魔術遣いに弟子入りしたこと、傭兵まがいの仕事をしたこと、冥獣の召喚に成功したこと、不良冥獣の討伐の際に死にかけたことなどを物語のように面白おかしく彼女に話して聞かせた。

あれほど敬遠していた術の話も、不思議と何の抵抗も無く受け入れられる。

彼が七つある属性の内の一つ、金の術を使う事も興味深かった。

「私の友達も金を使うんですよ。落ち着いたら一度会ってあげてください」

「ああ、いいよ。ビシビシ鍛えてやる」

そしてシイナはふと黙り込んだ。

ガリーナは、弾む会話の中でも、彼の鋭利な刃にも似た瞳の色は何時も緊張を忘れず、彼の放つ空気には余裕というものが存在しない事に気付いていた。焦燥を背負って生きている——そんな直感的なイメージが湧く。

長い静寂の後、シイナがぽつりと口を開いた。

「十年前、友人が殺されたんだ」

僅かにトーンの落ちた声音に思わず軽く身構え、ガリーナは彼の

言葉に神経の全てを集中させる。

「犯人は逃げた。それが――」

「……その死刑囚さんなんですか」

彼は黙したまま頷いた。

「そいつ、俺を庇って殺されたんだ。俺はその時何も出来なくて、混乱していて、気が付くとそいつが地面に倒れていた。一日中名前を呼んで、体を揺すって、夜が明けてからやっと解ったんだ。もう二度と、そいつは目を醒まさないんだって」

シイナの空気を見つめる目に、深く暗い過去を見出して言葉を飲み込む。

想像が出来ない。想像することすら苦痛だ。

例えば隣にいるのが当たり前、空気のような存在の人間が突然殺されてしまったら、自分ならどうするだろうか。喘いで渴望して憎むしか無いのでは、ないだろうか。

そんな絶望と共に、シイナはこの道を歩んで来たのだ。そして道は続く。

恐らくその犯人である死刑囚が死んだとしても、シイナ自身が死ぬ時まで、永遠に。

――既に訪れた過去に対抗する術など、人間は持ち得ないのだ。過去を殺す事など出来ないのだから。

「最後にかけた言葉は、罵声だったかな。馬鹿だよなあ、せめてもう少しあっただろうに。あいつが死ぬって知っていたなら」

「シイナさん……」

小さく呼ぶ声に、彼は疲れたような笑顔で応えた。

その相貌には達観と諦観と、

「悪い夢をみているような気分なんだ。そいつが死んだ時、きっと俺の一部も死んだんだろう」

恐ろしく強固な意志が宿っていた。

ガリーナには解らなかった。

逃げた死刑囚を捕らえる以上の、何か強く鋭い意志が彼を動かし

ている。それが何なのか、シイナが絶望すら凌駕するほどに望むものとは一体何なのか、彼女には理解が出来なかった。

どんな言葉をかけるべきか分からず、黙り込む。初めてこの異邦者のことを、恐ろしいと思った。

突然扉が開いたのは、その瞬間だった。

驚いて椅子から腰を浮かせると、雪崩れ込むように村の大人達が桑や鎌を持って中に押し入って来た。

「な、なんですか!？」

ガリーナが止める間も無く、男達はシイナを羽交い絞めにして大勢で押さえ込む。彼は抵抗し、悪態を吐いたが、多勢に無勢で敵うはずもなかった。あつという間に縛り上げられ、床の上に押さえつけられる。

「何をするんです、離してください! ひどいです!」

「酷いのはお前だろうが、ガリーナ」

煙草をふかしながら入ってきた老人が呆れたように言う。派手な色の眼鏡、派手な色彩のシャツにパンツに帽子。見紛うことなく、副村長のマールだった。

「怪しい奴を家に上げて、殺されでもしたらどうする? ま、お陰でこうやってあっさり捕まえられたから良いにしてもな。もう少し考えろや、若い身空で」

「そうよ、あんたもし乱暴でもされてたらどうするの! 泣くのはご両親だけじゃないよ!」

後ろでお玉を振りかざして顔を真っ赤にして怒っているのは、料理人ファイだ。彼女が危害を加えられていなかった事に心底安心したのか、細い一重の目にうつすらと涙すら浮かべている。

彼らと床に転がされたシイナを代わる代わる眺め、ガリーナは柳眉を下げた。

「でも……シイナさんは、死刑囚じゃないです」

「そんな証拠がどこにある?」

「俺は——違う、離せよ! くそッ!」

喚き散らすシイナを引き摺り起こし、男達はガリーナの家を出た。シイナのこめかみには乱闘の際に出来た小さな切り傷が痛々しく浮かび上がっている。

「離せつつってんだろこの薄らハゲ！ 殺すぞ！」

「本性出しやがったな。大人しくしてろ！」

農作業で鍛えた筋肉の屈強な男が薄くなった頭のとっぺんまで真っ赤にしてシイナを小突いた。

否応なく引き摺られながら、彼は必死の形相でガリーナを振り返って叫ぶ。

「おいお前、絶対に家を出るんじゃないぞ！ 絶対だ！」

戸口まで出て彼らを見送った聖女は、どうすることも出来ずに悲しそうにそこに佇むだけだった。ふと視線を彷徨わせると、ばつの悪そうな顔をして道に立つキリアと目が合った。

後編

キリアは、どう話せばいいのか迷った挙句、「馬鹿か」と唸る様に言うしか無かった。ガリーナは悲しそうに目を伏せ、沈黙を守る。「怪しい奴がいたら通報しろ、って言っただろ？ あいつは死刑囚なんだぞ、人を殺してる奴なんだ！」

「シイナさんは死刑囚さんじゃありません！ 冥魔術遣いなのにさつきも使わなかった、周囲の人を傷付けるのを恐れたんです。そんな人をあんな乱暴になんて、信じられない」

「術遣いだつても嘘なんだよ。使わなかったんじゃないって使えなかった、違うか？」

ガリーナの相貌がますます悲しげに歪むのを、キリアは苛立ちと共に眺めた。

誕生日だからどうのと言っていたから構ってやろうと家に来たのに、そこで目にしたのは彼女の家に入ってゆく見知らぬ顔の青年だった。自分の忠告を無視して死刑囚を家に上げるその場面を目撃し、彼は驚愕と共に焦慮も感じた。そしてすぐに踵を返してマールに伝えた――。

ガリーナを守る為にも、告げ口に似た行為を不当とは思わない。けれどガリーナ自身は感謝するどころか、悲しそうにキリアを見る。

それが何故か無性に腹が立った。

「おれ、お前のそういうところ、嫌いだ。お人よしにも程がある」「キリア……」

「大体、冥魔術遣いは嫌いじゃなかったのかよ。おれより初対面の奴の方が信じられるんなら、もう好きにしる。勝手に信じて殺されちまえよ！」

吐き捨てるようにそう言い残すと、返事も待たずに踵を返して駆け出す。背後でガリーナの何かを叫ぶ声が聞こえたが、無視をした。

森へと続く小道を真っ直ぐに駆け、腹の中で擡げる熱い怒りに任せて当て所なく足を動かす。

まず最初にあるのが怒り。そして次に情けなさ。

殺されていたかもしれないのに恐れるどころか彼を捕まえた村人を非難するガリーナに、そして彼女に信用されなかった自分自身に、物心ついた時からずっと一緒に過ごしてきた姉のような存在に、どうして自分よりもあんな胡散臭い犯罪者を選択されたのだろう。

自分は死刑囚よりも彼女の中で劣る存在なのだろうか。

そう考えると悔しくて仕方が無かった。気が付くと、小さな泉の前までやって来ていた。

空を見上げると、昼下がりを過ぎた頃の深く高い秋空が木々の隙間から顔を覗かせている。木漏れ日の冷たさに小さく身を震わせてから、この泉がガリーナが毎朝飲み水を汲みにくる所ではなかっただろうかと思い出した。井戸や川で事足りるだろうに、彼女はこの水が美味しいんだと言って頑なに聞かない。

確かに美味しかった。渡しそびれたものの存在をズボンのポケットに感じて、自嘲気味に笑う。

ここで暫く頭を冷やして、一晩眠れば彼女を許せるだろうか。そう思いながら木々の合間を縫って泉に近づき——思わず足を竦ませた。

泉の対岸にある巨大な切り株の上に、人が座っている。

その男はぼろぼろの薄汚れた灰色の服を着、白髪混じりの黒髭で覆われた相貌で手元を見つめている。そして手の中には、刃の大きな刀が納まっていた。

（う——嘘だろ）

キリアは思わずぐくりと喉を鳴らした。

男は髭と髪で覆われた双眸でじつと赤く錆びた曲刀を舐めるように凝視している。その節くれだった大きな手の甲に、囚人の証である二重線の刺青を見た時、キリアはやつとガリーナとあの青年以外の全ての人間が過っていた事に気付いた。

この男こそ、間違いなく、王都から逃亡してきた死刑囚だ。

逃げる際に数人の兵に怪我を負わせたと聞いた、その武器も携えている。

こんな危険な人間が、今日の前で自由を満喫していることに、キリアは恐怖を感じた。

（いや、これだけじゃ済まない。こいつはきつと腹も減ってるし金も無い、村の近所まで来たってことは近いうちに必ず何かする。何か――血生臭い事を）

早く村の連中を呼ばなければ。

身体とは裏腹に妙に冷静で冴えた頭でそう結論付けると、軋む筋肉を動かしてそつと木の陰に隠れようとした。

その刹那、俯いていた男の濁った灰色の瞳がキリアに穿たれた。稲妻に打たれたように立ち竦む。

泉を挟み、切り株に座った男と木の陰に佇むキリアは、痛いほどの沈黙の中で視線を絡ませた。男は動かない。石像の様に微動だにせず、同じく蛇に睨まれた蛙のようになっていているキリアを凝視する。動けなかった。

今すぐ踵を返して逃げたかった。

けれど、こちらがそういう素振りを見せたが最後、男が刀を振り上げて襲い掛かってくる事は容易に想像がついた。

粘ついた嫌な汗が背を伝い、乾いた喉を引き攣らせ、喘ぐように息をする。今、キリアの目に映る男は死刑囚でも人間でもなく、死という純粋な昏い炎だった。死が、こんなにも可視的な存在だということ、今まで知る術がなかった――。

キリアの肩に手が置かれたのは、その刹那だった。

金縛りから解かれるように身体を震わせて振り返ると、ガリーナがキリアを見下ろしていた。

彼女は男を見ようとしなない。目を合わせてはいけない事を、動物的な本能で知っているようだった。

そしてガリーナの口から出た次の言葉に、キリアは世界が引つ繰

り返る程の驚愕を覚えた。

「私が足止めしておきますから、村に行つて皆に教えてください。キリアは私より足が速いでしょう」

いつもの様な穏やかな口調で、諭すように言う。

彼女の翠色の瞳から目を逸らす事が出来ないまま、キリアは掠れ声で返した。

「ガリ、馬鹿言うな。むちゃくちゃだ」

「行きなさい、二人死ぬよりずっとマシです。早く」
堪えきれずに、叫ぶ。

「お前一人を置いて行ける訳ねえだろうが！」

「お黙りなさい！ 子供に何が出来ると言つんですか！ 早く！」
予想もしなかった剣幕に少年はびくりと肩を揺らした。

ガリーナが激怒するというのを見るのは、十一年間生きてきて初めてだった。視界の端で男が立ち上がるのを捕らえ、ガリーナが男を見据えキリアを庇うように前に立つのを認めた瞬間、キリアは弾かれたように走り出した。

頭の中は滅茶苦茶で、何も理解することが出来ない。

得意の冥魔術さえ、その編成を行う事は不可能だ。今はただ、世界中のどの動物よりも早く疾走しなければならない。速く、森を抜けて村に戻らなくてはならない。

でなければガリーナが死んでしまう。

無力な自分を守るために殺されてしまう。

道を外れ、草や茂みで足が小さな傷を作っても、キリアは速度を落とさなかった。

混乱した脳裏で警鐘だけが響く。

視界が滲んだ。

——死んでしまう。

堪えきれない声が漏れる。

絶叫する。

対向から駆けて来た誰かが恐ろしい速さで彼の脇をすり抜けて行

った事にも、その時は気付かなかった。

泉を迂回する男の足が思ったより速い事に気付き、ガリーナは身構えた。

恐怖も何も無い。ただ、どうすればあの男を転倒させあわよくば泉の中に叩き落す事が出来るかだけを考えていた。そして例え腕を叩き落されても、彼の足にしがみ付いて離れるつもりはなかった。少しでも時間を稼がなければ、成人男性の足ではキリアの俊足にも追いついてしまいかねない。

小さく息を吸い込んで重心を僅かに下げた時、男が正面に立った。振り被られた大きな刀に血がこびり付いているのが確認出来た時、世界が色を無くした。

ゆっくりと振り下ろされる刀は確実に自分の左肩を捕らえている。恐らく心臓あたりで刃は止まるだろう。

——ならば、右手はまだ動かせる。

躊躇う事無く男に向かって突進した。

切先が左耳の空気を揺らした。

その時。

「——！！」

誰かが何かを叫んだ。

その言葉はガリーナの語彙の範疇を超え、どんな意味があるのかは全く解らなかった。そして考える暇も無く——男が視界から消えた。横薙ぎに吹っ飛ばされたのだ。

ガリーナが衝動で倒れこむように後ろに尻餅を付くと、吹っ飛んだ男を追うように影が飛び出す。視界の隅で、巨大な土塊が大地から角を出しているのが見えた。男は突然現れたこの金属じみた固い土に突き上げられたのだ。

その土塊を呼んだ影は、シイナだった。

脇腹を押さえた男が、よろめきながらも長刀を構えてシイナを迎え打つ。

鈍く濁った刃の欠けた切先は、彼の心をそのまま反映しているように暗く光る。対してシイナは獲物を持っていない。素手のまま、迷うことなく男に向かって駆ける。

——殺される。

「シイナさんッ！」

裏返った声でガリーナが叫んだその瞬間、シイナが右手を体の横に構えた。

男が刃を振りかぶる。

そしてシイナは叫ぶ。血を吐くような、憎しみを込めた声で。

「下衆が——ッ——！」

光が走った。

そして冷たく澄んだ音がした。

根元から折られた長刀は、宙を切って切り株に突き立った。巨大な金剛石にも似たシイナの光の剣は、迷う事無く男の肩に吸い込まれるように刺される。

僅かな血飛沫と共に抜き取られた剣は、一瞬眩く輝いて弾け消えた。

刹那のようなその出来事が、全てだった。

世界が色を取り戻したのは、その瞬間。

崩れ落ちて身動きが取れなくなった男を睥睨したシイナの顔の傷が少し増えていることや、遅れてやって来た恐怖と安堵の為に泣きじゃくったことや、落ち着くまでシイナが肩を抱いていてくれたことは、なんとなく覚えている。

キリアに連れられた男達が血相を変えてやって来た時、ファイが号泣して彼女の頬にキスをしたり、そんなファイとシイナから奪い取るように泣き顔のキリアが謝りながらガリーナに縋りついたりした。

その無謀な行為を叱咤する者は誰も居らず、彼女が無事だった事を只管喜んだ。

そして死囚を捕まえ聖女を救ったシイナは、一躍勇者扱いで引

き摺られるように料亭に連れ込まれた。

その日は、村の一番長い一日だった。

尻餅の所為で土の付いてしまった服を着替え、橙色のスカートを履いたガリーナは、家から料亭に向かう途中で稲の海を眺めていた。傾いた陽は彼女の服と同じ色に染まり、長い影が大地に焦げ付いている。

まだ現実味が無い。

まるで長い夢を見ていたように、キリアを追って泉に向かってから先の記憶が途切れ途切れなのだ。

助けなければ、とその時は夢中だった。けれど、村人が驚嘆と共に彼女の行為を讃える時、その蛮行に誰よりも震え上がるのは彼女本人なのだ。

もう一度やってください、と言われればいやですと答えるに違いない。振り下ろされる刃に向かって突進するなんて、大の男だって萎縮する。

死刑囚の傷は致命傷には程遠く、今は青年団本部のある村民館に監禁されている。数日の内に領主の使いが引き取りにくる手筈だった。

「落ち着いた？」

不意にかけられた声に振り返り、微笑む。

「うっん、暫くは無理ですねえ。なんであんな事が出来たんでしょう」

シイナは呆れたような笑みを浮かべた。その笑顔は、昼に話した時に見せた様な鋭い意志は霧のように晴れていた。

「馬鹿だよな。お前がお人よしなのは分かったけど、俺が行かなかつたらどうなると思った？ 無謀は勇気じゃない。残された奴がどれだけ苦しむか、少し考えろ」

「そうですね……でも」

躊躇うように、ガリーナは小首を傾げて続けた。

「あの時私が死んでたら、キリアは苦しんだでしょう。キリアが死んでたら、私が苦しみます。でも、同じ苦しみなら生きている方がずっと可能性も未来もあるでしょう」

「自己犠牲が美しいと思えるなんて、若いからさ。けど嫌いじゃないな。お前のそういうところ」

夕暮れの風が海原を揺らした。夕陽色の蜻蛉が二、三匹、鼻を掠めて森へと消える。

二人は金色の稲穂を眺めたまま、暫く黙っていた。

「宴会はどうしたんですか？」

「まだこれからが山だってさ。厠に行くつてやつと放して貰えたんだ、酷い奴らだよ」

言いながら彼は頬に出来た新たな掠り傷を撫でて苦笑する。

縛り上げられて引つ立てられた後、隙を見て冥魔術の刃を作り出し縄を切つて逃げたのだが、その際に男達とまた乱闘になりかけたのだ。そして二、三発の拳をすんでのところかわし、泉に向かったと彼は言う。

どうして死刑囚とガリーナ達が泉にいたことを知っていたのか、と尋ねると、「俺は優秀な冥魔術遣いだから」とはぐらかす。

期待通りの答えが返って来ないので、ガリーナは不貞腐れたように頬を膨らませた。

シイナがそれを見て笑う。

永遠の一瞬を切り取ったようなこの金色の世界も、悪くないものだと思った。何より、シイナの憑き物が落ちたような清々しげな笑顔が、とても爽やかに心に沁み入る。

死刑囚はもう逃げられない。

彼の仇は、終わったのだろう。

「すつきりした顔してます、シイナさん」

金髪の青年はその言葉に小さく頷き、目を細めて遠くを眺めた。誰に言うでもなく、独り言のように呟く。

「満足だ。十年間眠れなかった。今日からはきつと、夢もみない眠

りにつける」

その横顔が、澄んだ大気に余りに違和感無く存在していた。ガリーナは思わずまじまじと彼の顔を見つめ、口を嚙む。

似ている訳、ではない。

だが同じだと思った。

余りに同一の存在だと、金色の太陽に包まれた大地に立ち、今初めて気付いた。

そしてガリーナは、熟考するよりも前に、小さく口にした。

「……キリア？」

ぽつりと響いた声に、青年は表情を変えることは無かった。静かな目でガリーナを映し、そして微かに口の端を上げる。

たったそれだけの何の変哲も無い動作に、ガリーナは空気の糸が途切れる音を聞いた。それは静かに、ふつりと力を落とし、辛うじて繋がっていた黄金の時間を空に溶かした。

その言葉が終わりを告げたのだ。

禁じられた時間を毀す、禁じられた言葉。

シイナは独り言のように何かを呟く。しかしガリーナには聞こえない。顔を彼に近づけた所で、シイナは満面の笑顔を作ってガリーナの頭を撫でた。首がぐらぐら揺れるほどに強く、ヴェールが落ちて髪もくしゃくしゃに掻き回された。

「あの、あの」

目を白黒させながら、少女はシイナを見つめ続ける。目を逸らすのが何故か嫌だった。

「——幸せになれよ、ガリ。これが俺の誕生日プレゼント」

子供のような無邪気な、そしてどこか淋しげな笑顔を最後に、光が弾けた。ガリーナが小さく呻いて瞼を閉じた次の瞬間には、青年の姿はどこにも無かった。辺りには黄金の海原と鈍い秋の茜空、風の穂を撫でる音だけが響く。

「シイナさん……シイナさん、どこですか？ シイナさん！」
無駄な事は知っていた。彼はもう二度と、自分の前に姿を現すことはない。けれど、ガリーナは青年の姿を探して、焦げ付いた長い影を引き摺って草原を行きつ戻りつした。

どれくらいそうしていただろう。

呆然と佇んで海原を眺めていたガリーナの隣に、少年が立っていた。

茜色に照らされた大地を滑るように風に流されたヴェールは、少年の手に収まっている。彼は怪訝な顔をして、ひたすら草原の果てを見つめるガリーナを見上げた。

「……どうしたの？ あの兄ちゃんは？」

小さく息を吐き、聖女は首を振った。

「還つちやいました。もう戻って来ないって」

「ええ？ だつておれ、冥魔術を教えて貰うって約束したのに。なんだよ、ずるいなあ。大人連中も金一封出すって言ってたのに」

不満げに口を尖らせるキリアは、彼女の橙色のヴェールを冗談半分で頭にくるくる巻いて肩を竦めてみせた。

ガリーナは稲穂に残される風の足跡から目を逸らさず、言葉に詰まらないように注意しながら返す。

「大丈夫、キリアならすぐにあの人みたいに上手になりますよ。それに、背だつてきつと負けないくらい伸びます」

はあ、と少年は間の抜けた声と顔でガリーナにヴェールを突き返した。それを笑顔で受け取りながら、彼女は空いた片手でキリアの頭を撫でる。もう慣れきっているので、キリアはそれを許した。

金色の短髪があつという間にくしゃくしゃになるが、その行為自体が今の彼には嬉しい。

彼女がここに存在していること自体が嬉しいのだが、敢えて口にしない。それは彼なりの男のポリシーというやつだった。

「ごめんな。信じてなかったのはお前じゃなくて、おれの方だった

んだ。お前がおれを信じなかったのは正解だったよ」

消沈したような小さな声にも、ガリーナは小さく笑う。キリアの頭から手を離し、髪をヴェールに仕舞いながら言った。

「私は貴方を信じなかったんじゃないくて、貴方を信じたんですよ。キリア」

「……は？」

「いえ、別に。さあ宴会に戻りましょう。タダで飲み食い出来るうちはお腹がはちぎれるまで食べるのです！」

俄然元気に声を張り上げたガリーナは、そのままぐるりと体を回転させて料亭へと向かう。それを不審げに眺めるキリアは、思い出したように彼女の服を引っ張った。

「あ、そうだ、おいガリ」

つんのめってバランスを崩し、片足でぐるりと一回転してキリアに向き直る少女に、ポケットから何かを引っ張り出して拳ごと突き出す。

「これ。やる。安かったから」

怒ったようにそう吐き捨てるキリアの頬が赤く見えたのは、空の所為だけではないだろう。

彼の掌に乗っているそれは小さなネックレスだった。

彼女の瞳と同じ、翡翠色の小さな宝石のとてもシンプルな作りのものだが、玩具同様の値段であるとは思えない。子供にとっては、非常に高価なものに相違なかった。

じつとそれを眺め、やがて手に取ったガリーナの瞳から、一粒の水滴が落ちた。

「なんだよ、泣くなよな。こっちが恥ずかしいだろ」

「これは」

嬉し泣きです、と言おうとしたが言葉にならなかった。

空の橙色は、優しげに彼女達を撫でては藍色に染まってゆく。黄昏が来る前に、ガリーナはキリアの腕を取った。少年はとても嫌だったが、今日ばかりはどうしても放してやる気にはなかった。

今夜からは安らかな眠りが訪れますようにと、祈るように願う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1832b/>

微瞑むように 【番外編 影よ、金色の晚霞に瞑りを】

2010年10月8日15時08分発行